

【講演会記録】

江戸時代に近代化の萌芽をみる

中 拂 仁

石見先生、中金先生からは「政治学における歴史の重要性—日本政治思想史に関する研究，教育経験を踏まえて—」という大きなテーマを頂きましたけれども、私自身が今、水曜日の4限目の日本政治思想史の講義の中で指摘していることは、大まかにいえば、江戸期社会に近代性が芽生えていたということ、つまり江戸期社会に近代性があったということでございますので、今回、そのような観点から話をさせていただこうと思います。

歴史というのは、それこそ時代区分が変わったからといって、すぐさま、それまで暗かったような状態がいきなり明るくなるというようなことは絶対にあり得ません。歴史というのは人間の営為が連綿と続いたものでありますから。私は30年近く、徳川期社会というものを研究しておりますが、一般に、特に40歳から50歳以上の方々には失礼ですけども、これらの世代の方は江戸期社会というのは非常に暗く捉える傾向にあると思います。実は私もその例にもれず、江戸期社会というのは非常に暗いものと思っておりました。ですが、よくよく考えてみましたらば、明治時代になって、いきなりああいう近代的な状況が開けたということはあるにあり得ないことであって、これはどうしてもその前の時代を研究してみなければ解明できないということに気付かされました。そのきっかけはですね、もうかれこれ25年前になりますが、私が大学の在外研究で、シカゴ大学に留学させていただいて、そこの東洋研究、主に日本研究をなさっているテツオ・ナジタ（Tetsuo Najita）という日系二世の先生の下で学ばせていただいたのですが、そのナジタ先生の『明治維新の遺産』（原題“Japan”）という本を大学院博士課程の時読みまして、大きな知的衝撃を受け

たことでした。そして先生の下で一年間、研究生活を送らせてもらいまして、その後も色々考えてみましたならば、江戸期社会に既に近代化を準備する要素が相当存在していたのではないかと、という見解に至ったわけです。まっ、人間のやることには陰陽、陽の部分と陰の部分があるのは至極当然なことなのですが、江戸時代には陰の部分も当然有ります。そしてその部分が強く意識されがちなのですが、しかしながらよくよく調べてみますと、陽の部分として、つまり明治以降の日本人の、いわゆる近代化を準備する要素が江戸期社会、特に江戸中期以降に多く存在している、ということを挙げることができます。そしてまた、これとは相反するようなかたちですけれども、国を閉ざしておりましたものですから、いわゆる伝統文化というもののが最も成熟した時期でもあります。特に、その文化の中でも生活面においていえば、江戸期中期以降は三度の食事をするようになった。これは灯りがその三度の食事をもたらすということになります。灯りがもたらすということは、物流が非常に盛んになるということであり、結局は人々の経済活動というものが非常に盛んになってくる。それによって、その伝統文化というものも、あるいはまた近代化につながる部分も、武士ばかりではなくて、その他、町民、農民、そういう人達の間の中でも非常に活発になってくるわけです。また農民は商品作物というものを作るようになってくる。それが経済活動を活発化させ、江戸、そして大坂というような大都市の中において消費活動が盛んになる。これが循環性をもの凄く活発にさせるのですね。そして、さらにそこから今日、伝統文化といわれる様々な事柄、華道とか茶道、あるいは武道、あるいはまた歌舞伎、あるいは相撲、大相撲ですね。そういうようなものの原型が江戸期社会、中期以降に、いわゆる様式美というかたちで生れている、ということに気付かされたわけです。

早速本題に入りますけれども、“江戸期社会の特徴”としてレジュメの一番目に書いてございますが、大正期に京都大学で京都学派、日本歴史の京都学派というものを作り上げた内藤湖南（内藤虎次郎）という先生が、『日本文化史研究』という書物の中で、日本の近代化を知るには1467年の応仁の乱以降、つまり戦国時代以降を研究すれば十分に事足りる、ということを断言されてお

ります。その後が続けて、それ以前はどこか外国の歴史を見ているようなものだと述べております。そういう意味で、1192年から1867年までが武家社会、封建社会といわれる時代であります。鎌倉・室町期とそれ以降の時代では、その性格が異なるということになります。余談ですが、今日において我々は通常、頼朝が鎌倉に幕府を開いたのは1192年と教わっておりますけれども、今日の歴史学界では、1185年が幕府の開設の年に当るのであるのではないかという指摘があります。この年に守護・地頭というものを任命する権限を頼朝が持ったということですね。それはまだまだ論争段階ですので、一応ここでは1192年から1867年までを武家社会、封建社会といわれる時代ということにします。

鎌倉・室町期、戦国時代までの武家社会というのは、いわゆる土地を仲立ちとする、領地を仲立ちとする関係性で説明することができます。いわゆる御恩と奉公の関係です。将軍と御家人、そして御家人の下には一族郎党が控えておりまして、御家人が手柄を立てたら、将軍から領地をもらえると。これが御恩というものですね。その代わりに、“いざ鎌倉”ということになったら、御家人は何があっても武器を持って鎌倉に駆けつけなければならない。これが奉公というものですね。そしてこの御恩と奉公という関係、つまり鎌倉期社会の武家の主従関係というのは、直接的で、そしてまた個別的であったといわれております。それが結局、争いを惹起する、常にどこかで争いがあるという状況を生み出すわけです。鎌倉・室町期というのは、武家勢力と公家勢力と、そして宗教勢力と、それぞれその荘園を互いに所有していたわけですが、徐々に武家勢力が力を持ってきて、“一円知行”というのを作り出していくような状況になります。武家勢力はこれを目指す。一円知行というのは、公家勢力や宗教勢力が影響力を持つ土地を全部取り上げ、武家勢力がそれを全部治めるということとございまして、これをずっと目指しておりました。しかしながら、それこそ公家のほうに武士が付いたり、あるいは宗教勢力のほうに武士が付いたり、いわゆる平和な状態というのはありません。どこかで日常的に戦が起きている、そういう状態です。そして室町期になりますと、足利氏が幕府を開きますけれ

ども、足利幕府というのは、寄り合い所帯のような、守護大名による連合政権の性格がありました。そしてそれまでの守護大名が力を持つ一方、守護大名の家来たちが、今度はまた守護大名を倒すという、下剋上の状況がずっと続きまして、常にどこかで、日常的に戦乱の状態が続く。それが個別的・直接的な主従関係がもたらしたものであったといわれております。その後、戦国時代になり、信長、あるいは秀吉、こういう人達がある程度この一円知行を達成するようなかたちとなり、最終的にはそれを引き継いだのが家康、ということになります。

家康の場合、幕藩体制という、幕府と約 250, 60 の藩との関係を主従関係として作り上げていきます。その幕藩体制というのが、組織的・間接的な主従関係でありまして、家康は新しい「忠」と「権」の関係を樹立します。「忠」というのは、その忠誠を誓う対象ですね、藩の大名たちが、あるいはまたその藩の家来たちが、どこにその忠誠を誓うかということ。「権」というのは支配権、覇権ですね。そういう関係を作り出し、それによって結果的には政治的変動の最も少ない時代を生み出したということになります。最終的には 260 年近くも安定した平和な時代をもたらすことになる。これには色々と批判もあると思いますけれども、世界史的に見まして、260 年間も内乱状態、あるいは内戦状態というものが無かった時代というのは、日本の徳川時代だけなのですね。

それでは、そういう状況を如何にして作り出していったのか、ということですが、まず「藩と大名の取り扱いと役割の明確化及び配置」という点が挙げられます。徳川家、将軍家に一番近い御三家、紀伊和歌山、尾張名古屋、そして水戸茨城、それぞれ家康の子供達はその祖となっておりますけれども、その御三家とか、あるいは一門、そして親藩といわれるような者達、いわゆる徳川家に非常に近い大名達ですね。こういう大名達は、それぞれの配置に工夫が見て取れる。日本地図を想像していただきますと、例えば和歌山、愛知、茨城というのは、江戸を囲みまして、それぞれ非常にいい塩梅で配置されているのです。あるいは会津とか福井、また福岡といった所には一門や親藩といわれる人達を配置している。なぜそのように配置したのかというと、各大名を監視する軍事的役割、つまり 1600 年の関ヶ原の戦いの時に、いわゆる豊臣方に付

いた西南雄藩、九州とか中国地方の雄藩ですね。あるいは東北地方の旧豊臣方の大名、こうした大名達を監督するという役割を担わされていた、ということです。また譜代というのは、家康が三河の領主であった頃からずっと家来であった、忠義の部下であった人達のことですが、その譜代大名というのは、江戸の周りに、せいぜい多くても2万石とか3万石、10万石といった小さな領地しか与えられておりませんが、江戸を取り囲むかたちで、八王子から小田原、北は埼玉の方にかけて配置されています。ただし、譜代大名でも特異なのは井伊家です。井伊家は彦根藩ですが、彦根という所は交通の要衝でありますから、非常に重要な位置付けであり、譜代大名でありながら30万石でしたか、譜代大名中、最大の領地を与えております。その譜代大名というのは、結局は幕内における政治的な要職を担い、また軍事的な役割も担っております。いわば最後の砦ですね。何者かが反乱を起こし、江戸城を陥れようとした時には、譜代大名が団結して江戸城を守る。そういう態勢を作った。それと同時に、これは非常に重要なことですが、その政治的役割です。幕閣、つまり老中や臨時に置かれる大老ですね、そういう重要な政治的決定の役割を担う重職には、ほとんどの場合、譜代大名が就いております。先生方もご存じの通り、大老として一番代表的な人物に、日米修好通商条約を勅許も無く結んだ井伊直弼という人物がおりますが、幕末に大老として権力を振るったと人物で、井伊家の末のほうの者になります。それから外様大名というのがございますが、先ほども申しあげましたように、それは関ヶ原の戦いの以前に、あるいは戦いの時も、いわゆる反徳川勢力であった人達のことですが、版図を縮小された上で、領土のみ保障されます。全体としてそういう配置が行われますが、これは、よく考えたものだ后感心させられます。

それと同時に、全ての大名には領土内での司法・財政・農政・教育等の行政権が保障され、将軍へ直接忠誠を誓うということになります。将軍に忠誠を誓うのは大名だけです。各大名はそれぞれ家臣を持ち、家臣はその大名に直接忠誠を捧げる。ですから、大名の家臣といわれる人達は、“陪臣”というかたちになります。鎌倉・室町期の一族郎党といわれる人達は、直接将軍とのつなが

りがあったわけですが、江戸期においては、それを剥がして、ある程度の行政権は認める、保障するけれども、大名の家来は、将軍家とは何の関係も無い、という方式を採用します。例えば赤穂藩の浅野内匠頭の起こした事件、吉良上野介に対して刃傷沙汰を起こした。それは浅野内匠頭が犯した罪であるから、赤穂家というのは取り潰しになり、家臣たちはバラバラになってしまう。結局はそういうかたちになるわけですね。そして、ここがまた非常に大事な所なのですが、幕府は全体としての権、すなわち支配権は、各諸法度、武家諸法度や禁中並公家諸法度といった法で、法律でもって取り締まることで担保する。それから諸施策、参勤交代とか、移封、これは言葉の通り領地を変えられることですね。あるいは改易、これは潰されること。こうした施策できびしく規制しました。そして幕府自体は軍事的・経済的優位に立つということです。幕府は旗本・御家人というものを持っています。いわゆる1万石以下の家来、そういう人達を持っています。それを江戸内に住まわせており、結果的に軍事的優位に立つという構造です。それに加え、経済的には、当時、おおよそ日本の経済的基盤が3000万石ぐらいだとされていますが、徳川家は800万石を少し超えるくらいの禄高を持っていたといわれております。大名の中で一番多いのが加賀前田家の100万石ですので、それと比べますと、相当な違いがある、そういう経済的な基盤に立っている、優位に立っているということがいえると思います。

また鎌倉・室町期との違いということで、「武士の土地からの分離」という点が挙げられます。鎌倉・室町期の武士は、自分の領地を守るために、いわゆる一所懸命、一つの所を、命を懸けて戦うわけですが、自分の領地に屋敷を建て、そこに住んで、というかたちであったのを、徳川幕府は身分制を作り上げると同時に、武士を土地から分離した体制を作ります。これが将来的に、約260年間もの平和的・安定的な社会状態を作るきっかけになったといえるわけです。武士の特徴は守るべき土地を持つ忠義の戦士ではなく、都市での俸禄生活をする官僚となります。武士は幕末まで実質的な都市的官僚エリートとなるのですが、専門的知識を発揮する、いわゆる知的営為の担い手となるわけです。

ね。これは後の結論の所にも少し書いておりますけれども、五代將軍の綱吉の頃、將軍家は湯島に聖堂を建立します。そして綱吉自身も朱子学を、儒学を講じています。そして徳川中期以降になりますと、各藩も、それぞれ藩の学校、藩校を持ちまして、武士のエリート教育を行います。そこで出てきますのが、朱子学の一番大事な、いわばそのキーワードになります「経世済民」という言葉なのですね。儒学、特に朱子学におけるキーワード、「経世済民」というのはどのような意味内容であるのか。朱子学では四書五經を重視しています。四書五經の四書というのは、『論語』『孟子』『中庸』『大学』、五經というのは『詩經』『書經』『礼經』『易經』『春秋經』のことです。その中でも朱子は特に『大学』を重視します。『大学』というのは1800文字ぐらいしかございません。余談になりますが、本学世田谷キャンパスの講堂の左の方を見ていただきますと、『大学』全文を書いた扁額が飾っております。これは国士館の最初の入学生、我々の先輩達が、三軒茶屋の古物商から買って、担いで運んで、講堂に掲げたという話を聞いたことがございます。ところで中国の学制制度、学校制度ですね、それは小学、中学、大学とあるのですが、小学の時には四書、『論語』『孟子』『中庸』『大学』の中の『論語』を学びます。中学になると、『孟子』『中庸』を習います。大学に入ると『中庸』と『大学』を学びます。そしてこの『大学』はいわば政治学の本なのですね。そして『大学』の、その結論として一番目指すものが「経世済民」ということになります。「経世済民」というのは、“世を^{おさ}むるは民を^{たす}済くにあり”と読みます。“世を経める”とは、これは政治ですね。政治の目的というのは人々を“済ける”，あるいは“救う”にあり、とも読みます。救う、あるいは済ける、これは困った人を救う、助けるという直接的な意味もありますが、人々が自立・自活できるような社会を作ることが“経世”だということです。そして“民を済くる”ということは、人々が自立・自活できるようにすること。それが“済くる”という言葉の本来の意味なのですね。溺れた人を助ける、といった意味のもありますけれども、そればかりではなくて、人々が、農工商の人々が、それぞれの分野で自立・自活すること。幕末になりますと、身分社会もいくらか緩んできますけれども、それ

までは厳として身分社会の時代ですので、農工商という人々がそれぞれの分野で、ということになります。また荻生徂徠という人物は、この土農工商というのは、それぞれが、それぞれの役割を果たすことによって機能的に作られた社会である、ということをその当時、既に言っております。そういうものです。ただし、朱子は、「経世済民」というものを達成するための究極目標を「聖賢」あるいは「賢人」とし、『大学』の三綱領八条目というものを強調しております。それでは、三綱領八条目というのはどういうことであるか。三綱領というのは、明明徳、止至善、それと新民。明明徳というのは明徳を明らかにする、止至善というのは至善に止まる、新民というのは民を新たにすることですね。明明徳と止至善というのは、いわゆる人間性の陶冶なんです。『大学』が求めている「経世済民」を行えるような「聖賢」を目指し、その「聖賢」が達成するような目的が明明徳と止至善なのですね。そしてそれが支配する立場に立って、民を教化する。論語、あるいは儒学というのは、元々、当時の男性中心の社会の中で、最終的に「賢人」を目指している学問ですので、今日の民主主義社会とは根本的に状況が異なりますので、無批判に受け入れられるようなものはほとんど有りませんけれども、当時の人達は、社会的要請としてこれで十分だったわけです。そして、その三綱領を達成するために必要なものが八条目といわれるもので、格物・致知・誠意・正心・修身・齐家・治国・平天下のことです。まず格物ですが、特に朱子という人物は、この格物ということを重視しております。格物というのは何かといいますと、“物に^{いた}格る”ということ。つまり物の「理」を追究する、「真理」を追究する、いわゆる「窮理」、「理」を窮めるということです。現在では、物の「理」、物理学と訳しておりますけども、明治時代は物理学のことを窮理学と呼んでいました。「真理」を追究するという、「理」を追究するということ。そして、その「理」を追究して、これを解明できたならば、それが致知です。それが「知」です。「理」が「知」につながります。「知」に^{いた}致るということになります。それから誠意・正心。これは読んで字の如く。そして、そこまでが先程の明明徳と止至善にあたります。明明徳というのは、人間が本来備わっている徳を明らかにする。それから止至

善というのは、最高の善に止まる、最高の善を維持する、キープするという意味です。つまりそれが格物・致知・誠意・正心の部分となります。そして、そういうかたちで身を修められた人物は、齊家、家を^{ととの}齊えることができる。家を齊えるというのは、家族全員を飢餓とか、あるいは寒さ、そういうことから家族を守り、養っていける、それを齊家といいます。そして、そういうことができる人物が、もし治国、つまり国を治めれば平天下、天下は平らかであると。天下、世の中が平和であるということ全てにつながっていくわけです。またこれは反対のことも言えます。天下を平らかにしようとするならば、国を治められる者がいなければならない。国を治められる者は家を齊えることができる。その家を齊えることのできた人間は、ちゃんと格物・致知・誠意・正心という修身ができていて、ということにもつながっていきます。

ところで、この「理」を追究するという考え方、これが朱子学の中心になっている部分なのですけれども、これが、幕末期に欧米的な合理主義思考を受容するのに大きな影響を与えたといわれております。これがあったからこそ、知らず知らずのうちに、合理主義的な考え方というものを受け入れることができたということです。一方、中国では、後で結論の部分にも書いてございますけれども、いわゆる儒学というのを、それこそ読み、あるいは暗記といった、学問のただ一つ的手段として位置付けられました。中国にはいわゆる“科举”という制度がございましたが、儒教は“科举”を実施して、それに合格させるための手段として扱われています。また古い時代の、いわゆる孔子孟子の頃の儒教というのは、論語等に代表されるように、やはり人間の道、倫理的な部分というのが非常に強いわけですね。しかしながら朱子という人物が、南宋、南の宋ですが、これが異民族に攻め入られた時に、ナショナリズムというものを高揚しようとして、禅の影響を受けて、「理」というものを非常に追究するような、それまでに無かった哲学的な学問体系に仕上げたわけですね。これがおよそ12世紀です。中国はそういう状況でありましたけれども、朱子学の中の「経世済民」という言葉そのもの、あるいは「理」というものは、ごく一部の人間しか、あるいは趣味の世界のような部分でしか使われておりません。他方、

日本においては、それが江戸の中期以降の、様々な私塾等において、色々と考究される。特に荻生徂徠などは、『政談』という建白書を書きまして、これを八代將軍吉宗に献上しております。その中には「安民」ということが述べられています。この荻生徂徠という人物は、朱子学を批判しておりますので「済民」という言葉は使っておりませんが、政治の目的というのは「安民」にある、というような言葉を使っております。また荻生徂徠は、極端に言えば、政治の手段というのはあまり問わない、結果が良ければいいんだ、というようなことをその『政談』の中で述べております。いわゆるマキャベリの考え方に通ずるところはあります。

それでは、あまり時間がありませんので、実際問題として中国ではそういうことが重要視されてないということを指摘しておきます。それから中国は中華思想に基づき、自身を中華と呼んでおりますけれども、いわゆる大中華ですね、自分の所が全部中心になる、自分の所が、文化も、様々なものが発展しているという考え方。そしてそれに大きな影響を受けたのは朝鮮半島であり、朝鮮半島は小中華主義をとっております。大中華の中国が駄目になったら、小中華の朝鮮半島がその代わりとなる、というようなかたちをとっております。そういう両者の関係性がありますけれども、大中華の中国にも、小中華の朝鮮半島にも、この「経世済民」という言葉が重要視されてないのです。

結論の所に少し書いたことを読ましてもらいますけれども、鎌倉・室町期の武士は、一所懸命に自分の領地を守っている。一つの所、つまり自分の領地を命を懸けて守るわけですが、江戸時代の武士達、つまり土地から切り離された江戸期の武士は、幕府は勿論、諸藩で行政的な手腕が求められるに従って、政治的自覚が芽生えてきた。そこで幕府では大体 17 世紀の初め頃ですが、五代將軍綱吉が湯島に聖堂を建立し、朱子学を講じ、各藩も藩校を建て、朱子学は勿論、古学、陽明学等の中国伝来の学問を考究するようになった。古学というのは、荻生徂徠等が唱えた学問です。古文辞学ともいいますが、古学というのは、いわゆる孔子孟子の時代に戻れということを主張しています。そこから「理」の追究の訓練や、本土中国では殆ど重視されなかった「経世済民」

を日本独自に解釈・運用し、武士が行政的・政治的自覚を持ったことが近代への懸け橋になった。この「経世済民」の解釈方法が、中国へ逆輸入されております。本家本元の中国では「経世済民」という言葉の解釈、それから運用、そういうものがなされて無かったわけですが、中国の人達もようやく気が付くことになります。これは特筆するに値します。また“economy”の訳語に“経済”という用語を充て、現在、中国もこれを使用しております。“経済”という言葉は「経世済民」から来ているのです。それで“political economy”というかたちになります。“政治経済学”です。ですから経済とは隣接科学で非常に密接な関係があるということになります。そして幕末期の欧米列強との条約締結を経て、日本の独立を守ったことは強調される必要があるでしょう。特に1854年の日米和親条約を期に下田へやってきたハリスと、もの凄い理詰めの談判を行った岩瀬忠震という人がいます。その人物等が、4年後に結んだ日米友好通商条約は、これはアメリカだけでなく、続いてオランダとかロシア、イギリス、フランス等々と同様の条約が結ばれますけれども、とにかく我々は中学高校の時、非常に不平等条約であったと教わりましたけれども、その関税自主権が無かったということに関しては、その時の、その関税というのは、どこの国においてもおおよ現在の20%ぐらいだったそうです。ですからそれは必ずしも関税自主権が無かったということにはならない、という説も出てきています。ただ、治外法権に関して不平等条約であったということは、紛れもない事実であろうと思います。それから、後に勝海舟等が横須賀に造船所を作る、海軍造船所を作ります。これは横須賀の基地として今日に至っている。現在もアメリカ軍の基地になっております。

明治時代以降の歴史教育において、どうしても維新、あるいは革命的なものを起こした場合には、前の時代を否定しなければ今の時代は肯定されませんので、江戸時代というのは非常に否定されるのは致し方ないことですね。我々は明治時代以降の歴史教育を教わってきていますので、そういうふうに捉えがちではあります。ですが幕末の官吏という人達も、確かに、もう官僚になっておりますので、新しいものに対しては、対応性が非常に鈍かったかもしれません

江戸時代に近代化の萌芽をみる（中拂）

が、結局は、それなりに明治以降に継承している，ということももう少し考えてみていただければと思います。

そういう結論が，日本政治思想史及び，隣接学の日本政治史を研究して学んだことであります。故に政治学を研究する上においては，絶対に歴史学関連の科目は必要である，ということを思考いたします。

12 時迄ということでしたので，丁度 12 時で終わらせていただきます。どうも御清聴有難うございました。

主要参考文献

『大学』（宇野哲人全訳注，講談社学術文庫）

『江戸時代とはなにか』（尾藤正英著，岩波書店）

『明治維新の遺産』（Japan）（テツオ・ナジタ著，坂野潤治訳，中公新書）

『日本文化史研究』（内藤湖南著，講談社学術文庫）

『江戸の知識から明治の政治へ』（松田宏一郎著，ぺりかん社）

〔付記〕本講演録は，2013 年 6 月 25 日開催の第 33 回政治学研究会における講演を録音から起こしたものである（中金記）。